DOBOKU偉人伝

江戸、明治、昭和と時代に合わせて姿を変えてきた東京のまち。
総人口100万人を超える世界有数の巨大都市に暮らす多くの人々の生活を支えた
インフラ整備とそれを手掛けた“人”にスポットをあてる。

第二回

樺島正義と日本橋

樺島正義
（『四谷見附橋開橋記念』誌より引用
国会図書館デジタルコレクション所蔵）

日本を代表する名橋の設計者の一人

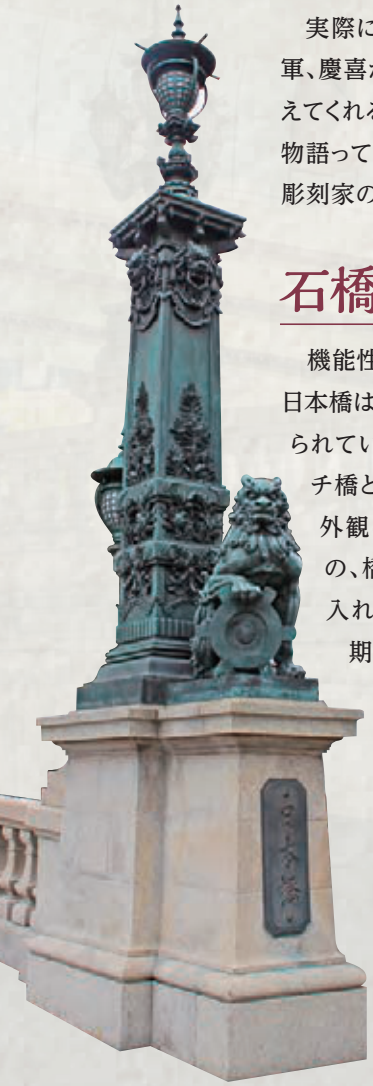
江戸開府から人口が急激に増加し、世界屈指の都市へと発展した江戸のまち。その中心であり、五街道の起点にもなった日本橋は江戸の象徴ともいえるだろう。日本橋は江戸時代、木製の太鼓橋だったため、火災による焼失で何度も架け替えられてきた。そして、明治後期には外観は石橋、内側はレンガとコンクリートが充填されたハイブリッド式のアーチ橋へと生まれ変わった。その設計に大きく関わったのが樺島正義である。

日本橋竣工翌日の写真「（前略）行人織るが如く車馬絡繹たるの図也」と、その盛況ぶりがうかがえる
（竣成したる日本橋『グラヒック 3(9)』有楽社　国会図書館デジタルコレクション所蔵）

機能性と意匠性を兼ね備えた日本橋

樺島は、1901年に東京帝国大学工学科を卒業後渡米し、橋梁設計事務所で6年にわたり橋梁設計の実務を経験する。ちょうどそのころ東京市では、木橋である日本橋の老朽化が進み、架け替えが急務とされていた。1907年、東京市役所に全国で初めて橋梁専管の組織「橋梁課」が生まれ、その初代課長として白羽の矢が立ったのが樺島だった。

樺島は、主任技師の米元晋一とともに日本橋の設計に取り掛かる。アメリカ仕込みの最新の橋梁技術を活かし、より頑丈で耐久性に優れた構造を目指す中、意匠設計に関しては建築家である妻木頼黄に総括を任せた。それまで特に分かれていなかった意匠デザインを建築家に委ね、構造デザインと意匠デザインの分業制にしたのだ。そして1911（明治44）年4月に日本橋が開橋した。



実際に日本橋を訪れると、徳川最後の将軍、慶喜が揮毫した橋銘板「日本橋」が出迎えてくれる。流麗な文字がその格式の高さを物語っている。橋の四隅に配置されたのは、彫刻家の渡辺長男が製作した獅子像。各柱座には、中国神話に登場する伝説上の動物、麒麟の像が堂々と佇む。6基ある燈柱には、松と榎の紋様が施され、和洋折衷の装飾が見られる。橋梁に建築の要素が加わったことで、近代的な都市景観の概念は大きく変わったのはいうまでもない。

石橋とコンクリート、レンガのハイブリッド橋

機能性と意匠性を兼ね備えただけでなく、日本橋は、世界でもあまり例のない構造で知られている。その見た目から石造二重アーチ橋と言われるが、実際は、橋の側面や外観はすべて花崗岩でできているものの、橋の内側にはレンガとコンクリートが入れられている。明治末期から大正初期にかけて橋梁技術は、石やレンガ構造から鉄筋コンクリートへと変わる時期であったにも関わらず、最先端の鉄筋コンクリートではなく、そのようなハイブリッド式がなぜ採用されたのかについては定かにはなっていない。石橋であっても、舗装やアーチ部分には茨城県笠間市の稲田の石、側面は茨城県桜川市の加波山のものを使用するなど、材料の特性によって使う石を変えるこだわりを見せている。樺島自身も橋を手掛ける際には、独特のディティールを加えるなど、オリジナリティーを常に追求していたようだ。

樺島は、東京市を離れた後、日本初の橋梁コンサルタント会社「樺島事務所」を設立。生涯一橋梁エンジニアとして多くの橋梁の設計に携わった。

樺島は「都市の美化には（中略）人目に触れやすく、最も美化し甲斐のあるのは何と言っても橋梁であろう。」と語った
（橋梁の景観美に就て『帝国工芸 2(7)』帝国工芸会 1928年　国会図書館デジタルコレクション所蔵）

江戸の象徴と戦後日本経済成長の象徴がクロスする橋

樺島らがこだわって完成させた日本橋は、関東大震災や第二次世界大戦など幾多の困難にも負けず当時の姿を今に残している。しかし、時代とともに戦後の経済成長とともにその景観は一変している。1964年の東京オリンピックの開催を機に、橋の上に高速道路が造られたのである。江戸の象徴ともいえる日本橋の上には、戦後日本経済の象徴の高速道路が見える。もし今樺島が生きていたなら、この風景は、樺島の目にどう映ったのだろうか。

そして現在、首都高日本橋区間地下化事業によって2024年には樺島が見ていただろう景色に近づこうとしている。時代を超えていろいろな人の思いを内包しながらきょうも多くの人や車が日本橋の上を渡っていく。

1963年（昭和38年）6月13日
首都高速道路4号線の架橋工事の様子（朝日新聞社 提供）

参考文献
・鹿島出版会「［論考］江戸の橋制度と技術の歴史的変遷」2007年
・土木学会「100年橋梁A Hundred Year OldBridges～100年を生き続けた橋の歴史と物語～」丸善出版2014年
・陣内秀信「水都東京-地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外」ちくま新書2020年